

40407

教科書文庫

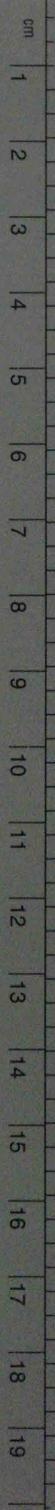
4
110
31-1933
2000-0
35903

20003
02764**Kodak Gray Scale**

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

**Kodak Color Control Patches**

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
110
31-1933
2000302764

複式編制學校兒童用甲
第三四學年

尋常小學修身書

文 部 省

資料室

395.9
M014

教科書文庫
4
110
31-1933
2000302764



文 部 省

広島大学図書

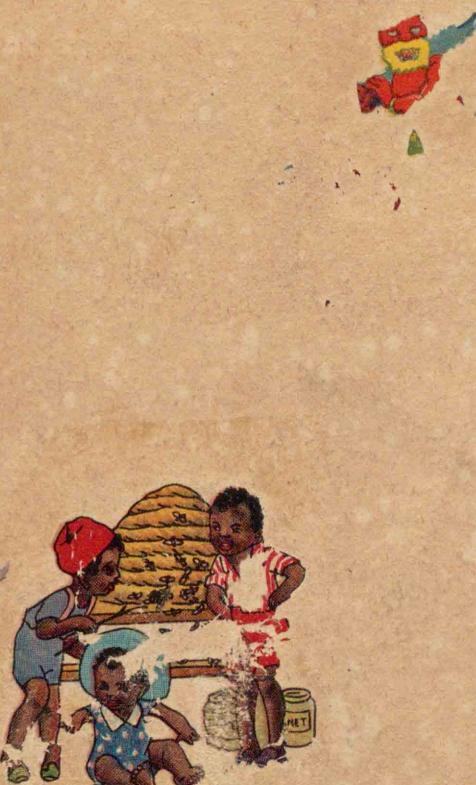
2000302764



尋常小學修身書

複式編制學校 兒童用 甲

第三四學年



もくろく

第一 かうかう	一	第十四 じりつじえい	二十八
第二 かうかう	二	第十五 仕事にくふうせよ	三十一
第三 兄弟	五	第十六 ちゅうくんあいこく	三十五
第四 べんきやう	七	第十七 明治天皇	三十七
第五 きりつ	九	第十八 祝日・大祭日	四十一
第六 せいとん	十一	第十九 しやうぢき	四十四
第七 友だち	十三	第二十 けんやく	四十七
第八 師とうやまへ	十五	第二十一 きんじよの人	四十九
第九 くわんだい	十七	第二十二 こうえき	五十ー
第十 けんかう	十九	第二十三 生き物をあはれめ	五十二
第十一 ゆうき	二十	第二十四 はくあい	五十五
第十二 こころざしをかたくせよ	二十三	第二十五 よい日本人	五十七
第十三 物事にあわてるな	二十六		

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我力臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我力國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉

シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我力皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセんコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

第一 かうかう

むかし播磨はりまにおふき
といふかうかうなむ
すめがありました。八
つの年から子もりな
どにやとはれてうち
のくらしをたすけま
した。又九つ十のころ
には、父がざうりやわ



らぢを作るそばで、わらをうつて手つだひました。十一の時からほうこうに出ましたが、じゆじんからもらつた物は父母におくりました。又ひまがあれば、じゆじんのゆるしをうけて家へかへり、ふたおやをなぐさめました。おふきはかやうにおやをたいせつにしたので、りやうしゆから、ごはうびをいただきました。

第二 かうかう

渡邊登わたなべのぼるは十四のころ、家がまづしい上に父がびやうきになつたので、どうかしてうちのくらしをたすけて、父母の心をやすめたいとかんがへました。登ははじめ、がくしやにならうと思つて、がくもんをべんきやうしてゐましたが、ある時人から「ゑをかくことをけいこしたら、くらしのたすけになるだらう」とすすめられ、すぐあるせんせいについて、ゑをならひました。

父は二十年ばかりも
びやうきをしてゐま
したが、登はその長い
間、かんびやうをして、
少しもおこたりませ
んでした。父がなくな
つた時、大そうかなし
んで、なきながら、ふで
をとつて、父のかほか



たちをうつしました。さうしきがすんだ後も、
朝ばん着物をあらため、つつしんで父のゑす
がたにはいれいをしました。

孝カウ
ハオヤラヤスンズルヨリ大イナルハナ
シ。

第三 兄弟

登の弟やいもうとは、皆早くからよそへやら
れました。
八つばかりになる弟が、ほかへつれて行かれ

る時、登は弟のふしあ
はせをかなしんで、雪
がふつてきむいのに、
遠い所までおくつて
行つてわかれました。

弟が知らない人に手
を引かれ、うしろをふ
りむきながらわかれ
て行つたすがたがあ

まりにかはいさうであつたので、登はいつま
でもその時のことと思ひ出してなげきました。

第四 べんきやう

登はさきに人のすすめにより、あるせんせい
について、ゑをならつてゐましたが、おれいが
十分に出来なかつたため、二年ばかりでこと
わられました。登は力をおとしてないてゐた
ら、父が「これぐらゐなことで力をおとしては



ならぬ。外のせんせいについてべんきやうせ
よ。といひました。

登は父のことばにはげまされて、外のせんせ
いについてならひました。そのせんせいはよ
くをしへてくれられましたから、登は魚をかい
だんだんすすみました。そこで登は魚をかい
てそれを賣り、うちのくらしをたすけながら、
なほなほ魚のけいこをはげみました。又その
間にがくもんもしましたが、ひまが少ないので、

毎朝、早くおきて、ご
はんをたき、
その火のあか
りで本をよみま
した。

カンナン、ナンヂ
ヲ玉ニス。

第五 きりつ

登は父がなくなつて



から、そのあとをついで、だんだんおもいやくに取立てられました。

そのころから日日の仕事をさだめて、朝・ひる・ばんともそれぞれじこくにわりあて、それをかでうがきにして、その通りおこなひました。



こんなに登はきりつただしくしたので、ゑが大そう上手になつたばかりでなく、がくもんもすすんで、えらい人になり、せけんの人からうやまはれるやうになりました。

第六　せいとん

本居宣長もときりのりながはたくさんの本をもつてゐましたが、一本ばこに入れてよくせいとんしておきました。それで夜はあかりをつけなくて、思ふやうにどの本でも取出すことが出来ま

した。

宣長はいつもうちの
人にむかつて、どんな
物でも、それをさがす
時のことと思つたな
らば、しまふ時に氣を
つけなければなりま
せん。入れる時に少し
のめんだうはあつて



も、いりようの時に、早く出せる方がよろしい。
といつて聞かせました。

第七 友だち

友藏ともざうと信吉しんきつはしたしい友だちで、おなじ學校
をそつげふした後、二人ともおなじ工場にや
とはれて一しょにはたらいてゐました。
ところが信吉はあやまちがあつてひまを出
されました。友藏は友だちのためにいろいろ
とあやまつてやりましたが、しゆじんがゆる

しませんので、しかたがなく、をりを見てまたのまうと思つてゐました。

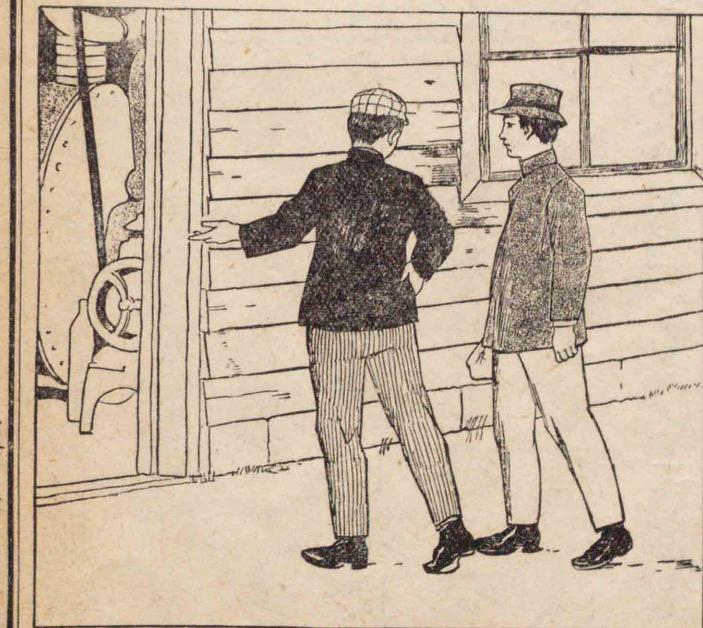
ある時友藏は新しい
きかいをくふうしま
した。しゆじんはそれ
をほめて、「何でものぞ
みをかなへてやる」と
いひました。友藏は「そ
れでは信吉をもとの

通りにつかつて下さい」とねがつて、すぐゆる
されました。しゆじんは又「はうびに家を作つ
てやらう」といひましたら、友藏は「友だちがゆ
るされました上は外にのぞみはございませ
ん」とことわりました。それからすぐに信吉を
つれてかへつて、二人でよろこびました。

第八

師をうやまへ

上杉鷹山は細井平洲をせんせいにしてがく
もんをしました。ある年平洲を江戸から米澤



へまねき
ました鷹
山はみぶん
の高い人であ
つたけれども、わざ
わざゑんばうまでむ
かへに出て、ある寺の門
前で平洲をまちうけてい
ねいにあいさつしました。それから

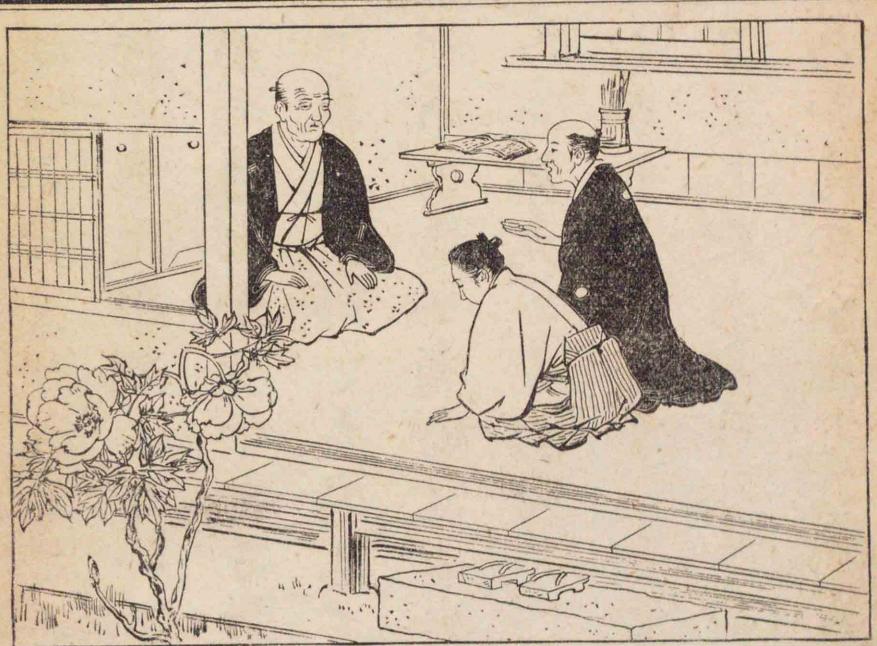


寺でやすまうとして、長いさか道をのぼつて
行くのに、平洲より一足もさきへ出ず、又平洲
がつまづかないやうに氣をつけてあるきま
した。寺についた時も、ていねいにあんないし
て、ざしきへ通し、心をこめてもてなしました。

第九　くわんだい

むかし貝原益軒といふ名高いがくしやがあ
りました。ある日外に出てゐた間に、るすいの
わかものがとなりの友だちとにはでますまふ

をとつて、益軒がたいせつにそだててゐたばたんの花ををりました。わかものはしんぱいして、益軒のかへりをまちうけ、となりのしゆじんにたのんで、あやまちをわびてもらひました。益軒は



少しもはらを立てたやうすがなく、「自分がぼたんをうゑたのはたのしむためで、おこるためではない」といつて、そのままゆるしました。

第十 けんかう

益軒は小さい時にはからだがよわかつたので、つねにやうじやうをしました。いろいろのしよもつをよむをりに、やう

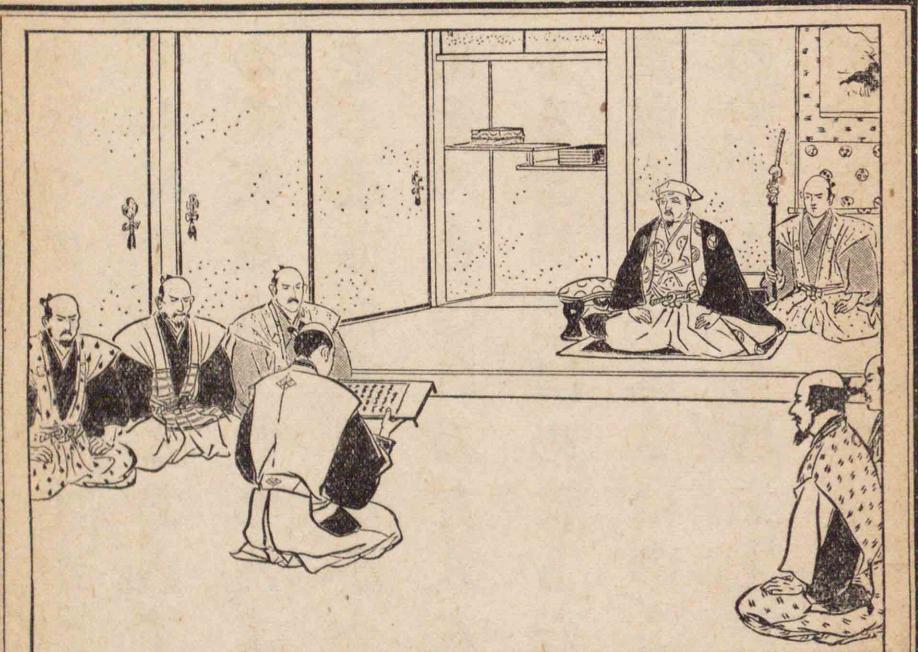


じやうのことのが書いてある所があれば書き
ぬいておいて、その通りまもりました。それで
からだがしだいにぢやうぶになつて、年をと
つてもおとろへず、八十五さいまでも長生を
して、たくさんの本をあらはすことが出来ま
した。

第十一 ゆうき

第十一 ゆうき
木村重成は豊臣秀頼しげなり とよとみひでよりのけらいでゆうきのあ
る人でした。秀頼が徳川家康とくがはいへやすといふ名をした。

時、重成は二十さいばかりでした。が、いさましいはたらきをしました。又重成は家康の所へつかひに行きました時、少しもおそれず家康の前へ出て、書き物をうけ取らうとしました。見ると家康



のけつぱんがうすかつたので、今一度、目の前
でして下さい」とおめずおくせずいひました
ので、家康はやむをえずあらためてけつぱん
をしました。重成がかへつたあとで、家康はじ
めそのそばにゐた人々は皆重成のりつぱな
ふるまひをほめました。

重成の十二三さいのころでした。大阪のしろ
の中^で、さうぢ坊主^(ばうづ)とたはむれてゐたら、坊主
がはらを立てて重成をさんざんにののしつ

た上、うつてかからうとしました。その時重成
は少しも取りあはずにゐたので、見てゐた人
人は重成をおくびやうものと思つてそしり
ました。後に徳川方といくさがはじまつた時、
重成が外の人にましていさましくはたらい
たので、前にそしつた人々も、ほんたうのゆう
きのある人だと、かんしんしました。

第十二 こころざしをかたくせよ

イギリスのジエンナーはふとしたことから、牛^(ぎゅう)

痘とうをうゑて疱瘡はうさうを豫防よぼうすることを思ひつきました。友だちにそのはなしをすると、友だちは皆あざけりわらつて、「つきあひをやめる」とまでいひました。それでも少しもかまはず、二十年あまりの間、さまざまにくふうをこら



し、とうとう種痘しゅとうの法はふをはつめいしました。まづ自分の子に牛痘うとうをうゑてみた上、しよもつに書いて、せけんの人にくらせました。ジエンナーはその後もいろいろとわる口をいはれましたが、ますますこころざしをかたくしてけんきうをつづけてゐました。そのうちに種痘が人だすけのよい法であると知れて、ひろくせけんにおこなはれるやうになりました。今ではせかいぢゆうの人がそのおかげ

をかうむつてゐます。

第十三 物事にあわてるな

毛利吉就のおくがたがすんでゐたやしきの
きんじよに火事がありました。けらいの人々
はおどろいて早くお立ちのきになるやうに。
とすゝめました。その時おくがたは人々のあ
わてるのをとゞめ、まづめい／＼が大切にす
る物をかたづけよ。あわててこちらからも火
を出すことのないやうに、火のもとに氣をつ

けよ。立ちのく時には、
女こどもは自分と一
しょに行くやうにせ
よ。とさしづをしまし
た。人々はそのおちつ
いたさしづにはげ
まされ、力を合は
せて火をふせぎ
ましたので、やし



複甲三四

きはぶじにのこりました。

第十四 じりつじえい

近江に高田善右衛門といふ商人がありました。十七さいの時、自分ではたらいて家をおこさうと思ひ立ちました。父からわづかの金をもらひ、それをもとでにして、どうしんとかさを買入れ、遠い所まで商賣に出かけました。道には、けはしい山さかが多かつたので、善右衛門はかさばつたにもつをかついでのぼる

のに、大そうなんぎを
しましたが、かたにづ
つはこび上げ
てやうく山
をこえたこ
ともあり
ました。又
時々さび
しい野原



複甲三四

を通つて、村々をまはつてあるき、雨が降つても風が吹いてもやすまずにはたらいたので、わづかのもとでで多くの利益りえきをえました。その後ごふくるゐを仕入れて方々に賣りあります。いつもしやうぢきでけんやくで商賣にべんきやうしましたから、だんくとりつぱな商人になりました。

善右衛門はつねに自分の子どもにをしへて、「自分ははじめから人にたよらず、自分の力で

家をおこさうと心がけて、せい出してはたらき、又その間けんやくをまもり、しやうぢきにしてむりな利益をむきぼらなかつたので、今 のやうなみの上となつたのである」といつて聞かせました。

第十五 仕事にくふうせよ

まるやまおうきよ
圓山應舉は毎日京都の祇園社へ行つて、多くの雞にほどりのあそぶありさまをぢつと見てゐたので、人々がばかものではないかと思ひました。

す。それでそばに草のかいてないことが大そうよいと思つたのです」と答へました。

ある時應舉は又ねてゐる猪をかゝりとしました。八瀬の柴賣女が自分の家



こんなにして一年もたつて、ついたてに雞の糞をかいたら、生きてゐるやうに出来ました。そのついたては祇園社にをさめました。これを見る人々はみんなりつぱだとほめるだけでした。がある日野菜賣の老人がしばらく見てゐた後、「雞のそばに草のかいてないのが大そうよい」とひとりごとをいひました。應舉は老人の家へたづねて行つてそのわけをたづねると、老人は「あの雞の羽の色は冬のもので

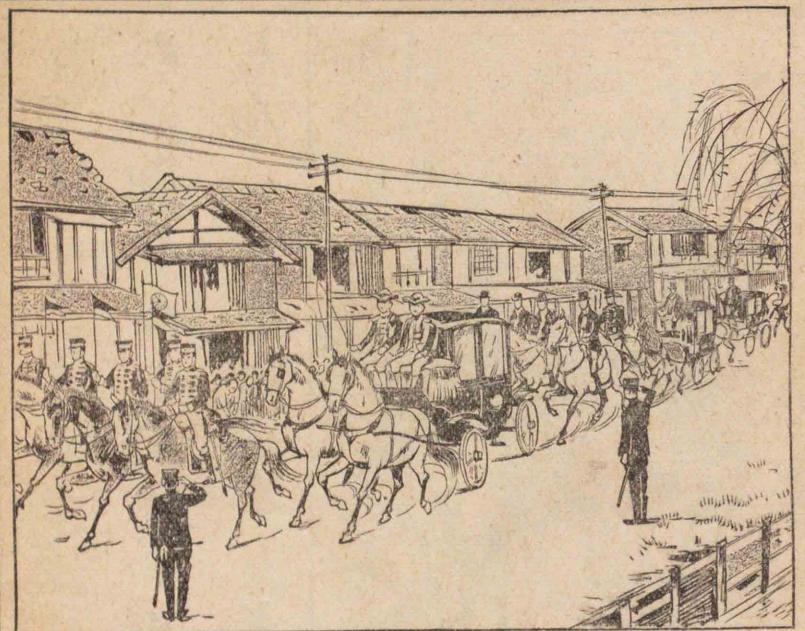
の後の竹やぶに一匹の猪がねてゐると知らせたので、すぐ一しょに行つて、そのありさまをかきました。鞍馬から來た炭賣の老人が、そのゑを見て、「この猪はせなかの毛が立つてゐないから、病氣にかゝつてゐるのでせう」といひました。その後で八瀬の女が来て、「あの猪はあそこで死んでゐました」とつげました。そこで應擧はあらためてたつしやな猪のねてゐるところを見てかきましたら、せけんの人が

ほめそやして、一時に應擧のひやうばんがあがりました。

第十六 ちゅうくんあいこく

明治十年に熊本のしろが、ぞくぐんにかこまれました。しろをまもつてゐた谷少將は、しろの中のやうすを、遠方のくわんぐんに知らせようと思ひ、そのつかひを伍長谷村計介にいひつけました。

計介はからだにすゝをぬり、やぶれた着物を



第十七 明治天皇

明治天皇はつねに人民を子のやうにおいつくしみになり、これと苦樂をともにあそばされました。

明治十一年天皇は北國御巡幸の時、新潟縣で目のわるい者が多

複印三四

くわんぐんの司
令部について、しゆび
よくつかひの役目を
しとげました。



着て、やみにまぎれてしろを出ました。とちゅうで、二度もぞくぐんにとらへられ、いろいろのなんぎな目にあひました。

三十六

いのをごらんあそばされて、それをなほすために御てもと金を下されました。又天皇はぢしんこうずる・火事などのさいなんにかゝつた人民をたびくおすくひになりますした。

明治二十三年愛知縣で大えんしふのあつた時、天皇はは



げしい雨の降る中で、へいしとおなじやうに御づきんをもめされず、御統監になりました。

明治二十七八年のいくさの時、天皇は大本營を廣島へ御進めになりましたが、大本營はしつそなせいやうづくりで、その一間が御座所でございました。天皇はこの御間にばかりし

じゆうおいでになつて、朝早くから夜おそくまで、御ぐんぶくのまゝでいろいろおさしづあそばされました。

天皇はつねに御しつそにあらせられました。
表御座所でお用ひのすゞりばこや、筆すみなども皆普通の物で、これを役に立たなくなるまで、おつかひになりました。又この御間のしき物は、ふるくなつて色がかはつてもおかまひなく、御いすの下の毛がはも、やぶれた所を

たびくつくろはせて、なかくお取りかへ
になりませんでした。

第十八 祝日・大祭日

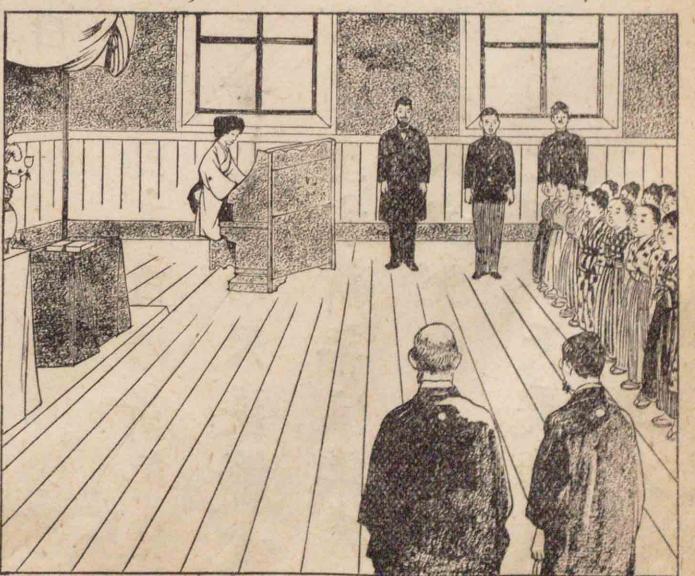
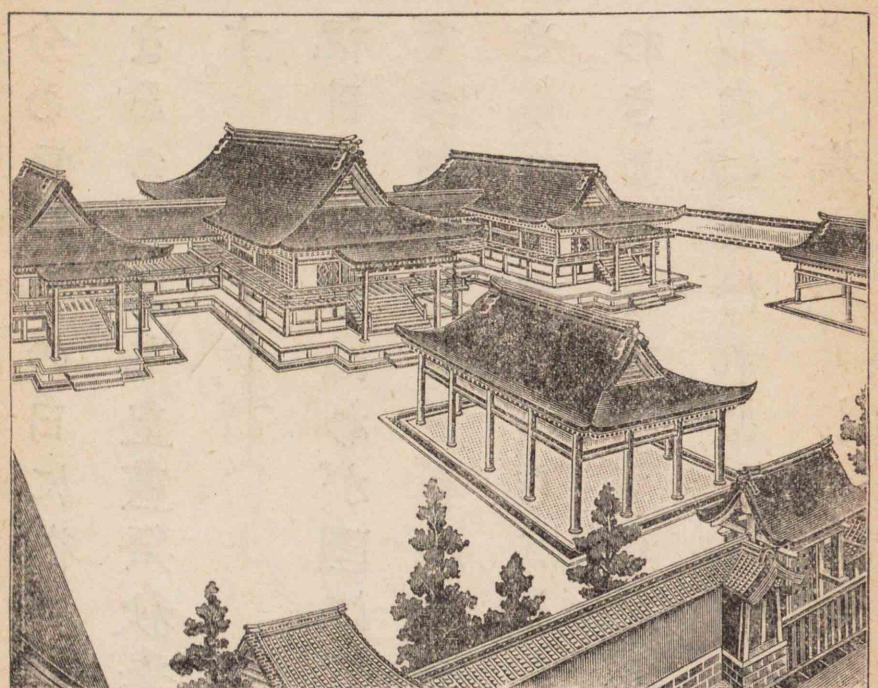
わが國の祝日は一月一日・二日・五日の新年、二月十一日の紀元節、四月二十九日の天長節、十一月三日の明治節でございます。新年は年のはじめを祝ひ、紀元節は神武天皇が御そくゐの禮をおこなはせられた日を祝ひ、天長節は天皇陛下のお生まれになつた日を祝ふので

ございます。

大祭日は元始祭・春季皇
靈祭・神武天皇祭・秋季皇
靈祭・神嘗祭・新嘗祭・大正

天皇祭でございます。元
始祭は一月三日で、宮中
の賢所・皇靈殿・神殿にて
お祭があります。神武天皇祭は四月三日、大正
天皇祭は十二月二十五日でございます。神嘗

祭は十月十七日で、
この日にはその年
の初穂を伊勢の神
宮におそなへにな
り、新嘗祭は十一月
二十三日で、この日
には神嘉殿にて神
神に初穂をおそな
へになります。又春



分の日、秋分の日に、御代々の皇靈をお祭りになるのが春季皇靈祭・秋季皇靈祭でござります。

祝日・大祭日はわが國にてまことに大切な日で、宮中ではおごそかな御ぎしきがおこなはせられます。われらはよくその日のいはれをわきまへて、ちゆうくんあいこくの精神をやしなはなければなりません。

第十九　しやうぢき

近江の河原市といふ所に一人の馬子がありました。ある日一人のひきやくを馬にのせて、あるしゆくまでおくり、家に歸つて馬のくらをおろすと、金がたくさんにはいつたかいふが出ました。これはさきにのせたひきやくのわされた物だらうと思つて、すぐに前のしゆくへはしつて行つて、ひきやくにあひくはしくたづねた上でそのさいふをわたしました。ひきやくは大そうよろこんで、「この金がなく

なると、私のいのちにもかゝはるところでした。あなたの御おんはことばではいひつくすることは出来ません」といつて、あつく禮をのべ、「お禮のしるしに」と金を出しました。しかし馬子は「あなたのお物をあなたがうけ取るのに何でお

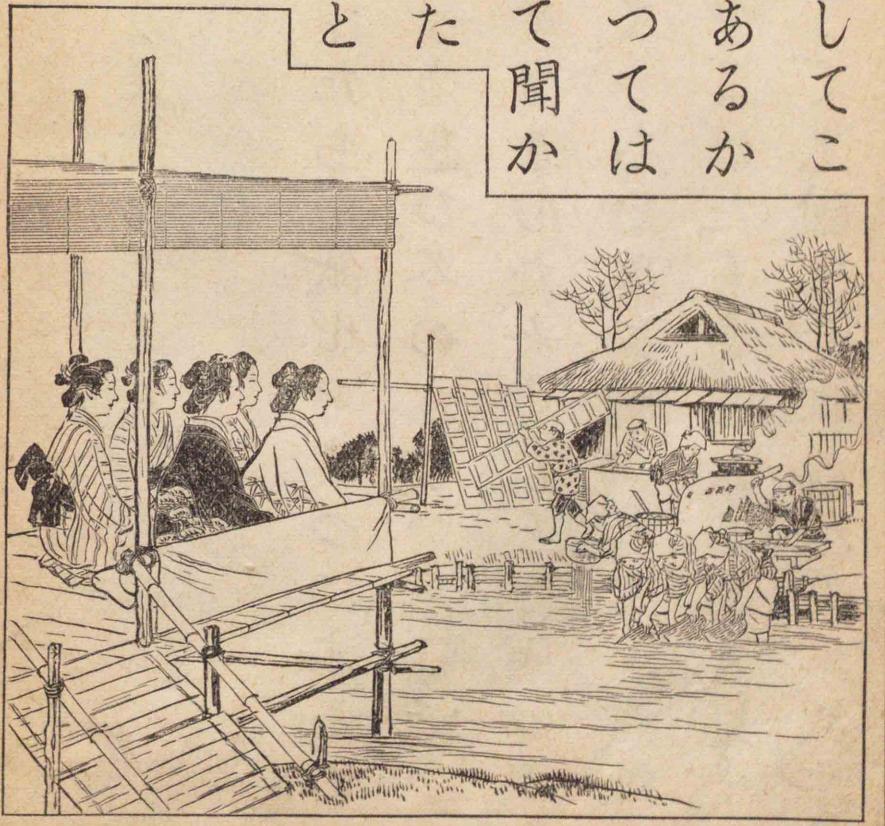


禮などといふことがありません」といつて、なかなかうけ取りませんでした。

第二十 けんやく

徳川光圀は女中たちが紙をそまつにするのをやめさせようと思ひ、冬のさむい日に紙すき場を見せにやりました。女中たちは川の上のさじきにゐて、さむい風に吹かれながら、紙すき女が水の中ではたらくありさまを見て歸りました。そこで光圀は「一枚の紙でも、紙す

き女がくらうしてこ
しらへた物であるか
ら、まだにつかつては
ならぬ。といつて聞か
せました。女中た
ちはなるほどと
さとつて、それ
からは紙をそ
まつにしない



やうになりました。

第二十一 きんじよの人

相模さがみのある村に佐太郎さたろうといふ人がありまし
た。うちがまづしかつたけれども、よくきんじ
よの人にしんせつをつくしました。ある時き
んじよの人の家のやねがそんじてゐるのを
見て、「なぜなほさないのですか」とたづねたら、
その人がびんぼふでなほすことが出来ませ
ん」と答へました。そこで佐太郎は村中の家か

佐太郎のすんでゐた
村のわうらいの土橋
はたびくそんじて、
人々がなんぎをしま
した。佐太郎は村役人
となつた時、役人なか
まとさうだんをして、
めい／＼のきふれう

第二十二 こうえき



複甲三四



ら、わらを少しづつ
もらひあつめ、自分
も出して、そのやね
をなほさせました。
又村の中で火事に
あつた人があると、
自分のやぶの竹を
切つて、その人にお
くりました。

五十

めで、小さい時からなきけぶかい人でございました。父がつかつてゐた羊ひつじかひに一人の老人じんじんがあつて、犬を一匹かつてゐました。ある時その犬が足をいためて、くるしんでゐました。その時ナイチングエールは、年とつた僧そうと一緒に通りあはせて、それを見つけ、大そうかはいさうに思ひました。そこで僧にたづねた上、湯ゆできず口をあらひ、ほうたいをしてやりました。あくる日もまた行つて、手あてをしてや

を少しづつたくはへておいて、その金で石橋にかけかへました。それからは長く橋のそんじることがなくなつて、大そうべんりになりました。

その外にも、佐太郎はいろいろと村のこうえきになることをしたので、人々にたつとばれ、村役人のかしらに取立てられました。

第二十三 生き物をあはれめ

ナイチングエールはイギリスの大地主のむす

りました。

それから二三日たつて、ナイチングエールは羊かいの所へ行きました。犬はきずがなほつたと見えて、羊の番をしてゐましたが、ナイチングエールを見るとうれしさうに尾を

ふりました。羊かいは「もしこの犬がもののがいたら、さぞあつくお禮れいをいふであります」といひました。

第二十四 はくあい

ナイチングエールが三十四さいのころクリミヤ戦役せんえきといふはげしいいくさがありました。たゞかひがはげしかつた上に、わるい病氣ふしきがはやつたので、負傷兵ふじょうへいや病兵びょうへいがたくさんに出来ましたが、いしやもかんごをする人も少い



ため、大そうなんぎをしました。ナイチンゲールはそれを聞いて、大ぜいの女を引きつれて、はるぐ戦地へ出かけ、かんごの事に

ほねををりました。ナイチンゲールはあまりひどくはたらいて病氣になつたので、人が皆國に歸ることをすゝめましたけれども、聞き



入れないで、病氣がなほると、又力をつくして傷病兵のかんごをしました。

戦争(せんきょう)がすんでイギリスへ歸りました時、ナイチンゲールは女帝(ぢよてい)にはいえつをゆるされ、あついおほめにあづかりました。又人々もそのはくあいの心のふかいことにつかんしんしました。

第二十五 よい日本人

天皇陛下は明治天皇ならびに大正天皇の御

こゝろざしをつがせられ、ますくわが國を
さかんにあそばし、又われら臣民しんみんを御いつく
しみになります。われらはつねに天皇陛下の
御おんをかうむることのふかいことをわす
れてはなりません。又祝日しゆじつ・大祭日だいさいじつのいはれを
わきまへ、ちゆうくんあいこくの精神せいじんをやし
なはなければなりません。

父母には孝行をつくし、兄弟はたがひにした
しまなければなりません。

師しをうやまひ、友だちにはしんせつにし、心を
くわんだいにし、じやうぢきの心をうしなはず、
きんじよの人にはよくつきあひ、こうえき
をはかり、生き物をあはれみはくあいの道につとめなければなりません。

その外、學問にべんきやうし、仕事にくふうし、
きりつをたゞしくし、物をせいとんし、からだ
をけんかうにし、ゆうきをやしなひ、こゝろざ
しをかたくし、物事にあわてないやうにし、じ

りつじえいに心がけ、けんやくをまもらなければなりません。

かやうに自分のおこなひをつゝしんで、よく人にまじはり、よのため人のためにつくすやうに心がけるのは、よい日本人になるに大切な事です。さうしてこれらの心えは至誠しせいをもつておこなはなければなりません。

をはり

複甲三四

昭和八年五月六日翻刻印刷

昭和八年五月廿二日翻刻發行

複式常小學修身書
編制學校第三四學年兒童用甲

一定價金七錢に

著作権所有 發著作者兼文部省

翻刻發行 東京書籍株式會社
兼印刷者 代表者 石川正作

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

昭和八年五月八日和昭
濟查檢省部文

發行所

東京書籍株式會社

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

東京書籍株式會社工場

広島大学図書

2000302764

